

イスラエルのキブツと 日本の協同体・その違い (五)

アブラハム・ベンヨセフ
訳 山 崎 雅 代

最終回

教 育

あらゆる社会は、子供達を、その社会特有の伝統に従って教育し、それぞれの生活形式を継承させている。それは、慎重に考慮され、そのままの形で教授されるというものではないにしても、無意識的に、或いは半意識的に、その方向が指示されるのは確実である。特にアメリカの教育は、そして、一般的に西洋の教育は、基本的には競争的、個人主義的、そして、非常に実用主義的である。日本においても、このような傾向が著しく、また極端にその方向に走ったので、子供達の生活は、個人主義の原則に基づく苛酷な競争によっておびやかされている。この逆に、いくつかの東洋の共同体と土着の原住民は、彼らの子供達に、完全な調和と協力に基づく教育を施している。この教育は、確かに、基本的なものであると言える。近代西洋の教育は、その近代的産業を支えることによって、大きな損害をこうむるが、本来なら、社会はそれをやめさせねばならないのに、かえってそれを増長さ

せてしまうという批判を、最近、アメリカのポール・グッドマンが示唆してきている。子供達にとって、自然の中で成長し、行動や労働を通して学び、本当に知りたいことや学びたいことが沢山書かれている本には自由に近づくことができ、彼らが必要とする場合には、もちろん、知識のある大人が援助し、指導するということは良いことである。

さて、イスラエルのキブツでは、生来の典型的な子供の姿を充分配慮し、精神面や、肉体面ばかりでなく、現在までの西洋に見られる実用的な面においても、卓越した独自の教育システムが展開されていることは驚異に値する。キブツ特有の、自然で有機的な発展は実用的で、常に人類の高い哲学的理想によって鼓舞されてきた。そして、その高い哲学的理想によって、多くのキブツの場合そうであるように、ほとんど偶然ではあるが、その長所の故に、世界の注目を集めるような教育システムを生み出した。

キブツの教育に関するいくらかの重要な影響の大きい本が、アメリカの専門家やその他の人々によって書かれている。それらのうち日本語に訳されている代表的なものは『キブツの集団教育』（草刈善造教授とキブツ教



子供達で行うプリムのお祭り

育研究グループ訳）と『キブツの教育』（ラビン著、草刈・奈良岡教授訳）の二つである。実際、キブツの教育について、ここで記述することは、ほとんど不可能なので、これらの本を、あらゆる人々に心から推せんしたい。キブツの教育を一言で言うならば、『構案教授法』を採用した総合的な方法である。即ち、教科内容が、それぞれ別個なものとなるハイスクール期に至るまで、同時にいくつかの課

題を与えて実物教授をする方法である。厳密な意味で『自由な学校』とは言えないが、子供達は厳格な懲戒を受けることはない。しかしながら、子供達の一人一人は、子供がその特性を自由に伸ばせるように助力を与えるべく、重大な責任を持つ『教育者』の監督の下に置かれている。これは、すぐれた教育という概念の表現であり、子供が、自分の中にある最高のものを見つけ、表現する手助けとなることを目指している。従って、西洋社会の病源である自己疎外というものは忌避される。自然観察や芸術教育、とりわけ音楽などは、キブツの教育の中でも際だったものである。もちろん、キブツはキブツ以外の社会と同じように、未来においてもキブツ社会が存続され、継承されるという希望を持って、子供達を教育している。しかしながら、多くの子供達がキブツから去っていくように、そうした希望は現在では必ずしも充分にかなえられてはいない。人間の自由に対する絶対的権利を侵すことは、キブツでは決してない。数多くの利点があるにもかかわらず、完全なものからは、まだはるかに遠い。特に女子のためのカリキュラムは、依然として厳しい批判の下にある。けれども、不完全さの認識と、常

に討論したり改善したりできる体制は、基本的に見れば、健全な姿勢を示している。ヘブライ語には『教育』を意味する言葉が二つある。その一つは『ハスカラー』である。この言葉は、知的教育を指す場合に使われる。つまり、西洋で、通常意味する『教育』である。そして、もう一つは『ヒヌツフ』である。これは、より正確にとらえれば、子供が成長する過程で言及される一般的な行儀、ふるまい、モラル、社会性の発達といったようなことを意味する。キブツの教育の美点は、このような教育の両面が決して見失なわれることがないという点である。キブツでは、学校が知的教育にたずさわることによって、子供達の両親が、躰を放棄するということはない。キブツの学校では、子供達の両親が、舞台裏で一致団結して教育に関与するばかりでなく、実際に躰と知的教育を並行して子供に接するよう訓練されている。これは多分、キブツの教育一般における特異な成果であろう。さらに、幼稚園の開始期から、彼らの個性を否定することなしに、教育は本質的に共同性をもっている。年令的に大きくなると、多くのクラス作業が連带的に行われる。これは、将来のキブツ生活のための訓練であり、全体的に



前森山農場を出発するスクールバス

見れば、現代社会の商業上の競争に見られる矮少さと対照的である。実際、キブツの子供の家や学校は、それを誇り高く『子供社会』と呼んで、一つの社会を形づくっている。『子供社会』とは、言うなれば、キブツ本来の民主的縮図である。若い人々のために、これは何と理想的な世界であろうか。

遺憾にも、日本の共同体運動とこの状況を簡単に比較できるのは嘆かわしい。一つか二つの例外の他は、事実『ナッスィング（何もない）』であると言わざるを得ないことは、きわめて悲しいことである。また、共同体教育もほとんど皆無であるというのが現状である。ほとんどの場合、子供達は、近くの村の学校に行き、それですべてである。もちろん、彼らは、子供なりの方法で地域共同体社会に参与することによって、『ハスカラー』ではなしに『ヒヌツフ』の面で、いくばくかの生活に対する一般的な知恵を得る。現実的には、単なる個人的な家族生活と比較すれば、こうした状況にも多大な利点があるといえようが、それを、仮にも共同体の教育システムであると呼べるだろうか。例外として顕著な一燈園では、なるほど、その共同体的教育システムが、カレッジ（専科大学）のレベルにまで達している。詳細は得られないが、主として、強烈でゆき渡った奉仕の精神をもって、自然に、真のすぐれた教育全般がほどこされていることは確かなことに違いない。もう一つの大きな、そして、古い宗教キブツである本州北部にある大和山も（この場合の宗教とは、神道という特別な意味である）まもなく、完

全な学校を持つであろう。新しい村は、幼稚園を持つている。しかしながら、幼稚園でなされるべき育児活動が、そこで行われていくかどうかは別として、日本の共同体の教育は、一般に知られている限りでは、それは何も手抜きや怠慢のためではないと弁明されるが、その程度に終止してしまう。

余計なことかも知れないが、このような状況の重大さに関する記述を、もう少しだけ加えることをお許し願いたい。たとえ、絶えない新来者の流れが続き、それが通常の状態ではないにしても、長期に渡るキブツ、あるいは共同体の将来が、その子供達によって受け継がれるのである。そして、もし、共同体の子供達が共同体外の学校に行けば、彼らは一般的な資本主義的指向性を持つ教育をうけることになる。従って、彼らは、次の世代の共同体社会を担うべき良き継承者としての資格を有さないようになるであろう。この点について、北アメリカの『ヒューテリテス』の例は顕著なものである。それは、世界で第二番目に大きなキブツ運動であり、一〇〇以上の共同体におよんで、約一五、〇〇〇人の人口を有しているが、彼らは、彼らの生活様式が、ほとんど完全に中世以来から受け継がれ

てきた旧式なものであるにもかかわらず、今日でさえも、彼らの子供達の大部分をそこにとどまらせることに成功している。この場合には、毎日の授業の前後に一時間と、日曜の課外授業で、彼らのキリスト教のピュリタン精神にしたがって教え込むことが、実行されている。したがって、その子供達は、学校の授業から一般的な知識を得るにもかかわらず、外部の世界を軽べつしている。必ずしも、これは理想的なものではないし、また、宗教的な方法でというわけでもないが、日本の共同体は、何か価値あるものを、ここから、少なくとも彼らが、彼ら独自の適当な教育のわく組をつくり出せるまで、見習うに価するものであろう。山岸会は、その子供達を、ある中心となる場所に集めて教育しようとして、総合的なキブツ形式の学校をつくるという実験的なプランを持っているが、しかし、子供達を各家庭から離れた所に連れていくことになるようなこの案は、たして実現可能なものか、また、それと同



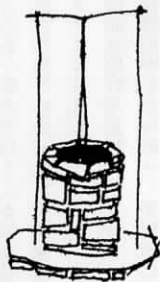
北 試 の 子 供

時に、それが望ましいことになるのかという点については、今のところ確かなものではない。



イスラエルと日本の共同体社会の思想上の主な違いを述べることをたくらんだこの連載記事は、このような批判をもって終りにしたい。この連載記事で述べてきたような問題は、

確かに包括的、ないしは均等に取扱われてはこなかったが、両者の相違が印象づけられたであろうし、それだから、日本的な型にとつて、模倣する価値のあるものを取り入れ、また、イスラエルのキブツ生活のうちで、日本の条件に合わないものは、きっぱりと退けるということについて、いくらかの人々は考えてくれるだろう。そして、最後に、すでに紹介した心から推せんすることのできる、すぐれた山岸会の研鑽会という、この分野における最高の日本の方式例から、イスラエルのキブツが、何かをうまく学びとることに期待しよう。



第12回キブツ研修ニュース(合宿)

時 8月24日～30日
於 長野県八ヶ岳



今回の正式応募者は四〇名、選考合格者は二九名でしたが、合宿参加者は、途中参加の人も入れて一九名でした。その内一名がとり止め、三名が個人で行くことになり、グループ人員一五名という、今までにない少人数のグループとなりました。

新宿から急行で三時間、ラッシュアワー並みの混雑の中を立ち続け、茅野駅に着いたのは二時二〇分。二時三〇分茅野駅前集合だったのですが、こんなに人がいては誰が研修生だか見当がつかず、「月刊キブツ」を振りまわして、研修生を集める。

八ヶ岳中央農場は、今年から名称を農業実践大学校と変え、農林省によって設立された農業後継者養成学校、兼農場です。海拔一三〇〇メートルで、夏でも朝晩は一五度C、昼間でも三〇度Cを越えることはまれであるという高原の中に、松林と白かば林に囲まれて立派な鉄筋コンクリート造り三階建て、四階建ての建物が並んでいました。その建物を横目で見ながら、我々はこの農場で一番歴史を感じさせる、明治一八年につくられ昭和一三年に諏訪からここへ移されたという建物(道志社)に落ち着きました。

一日のスケジュールは五時半起床、六時よ



朝の体操

り朝礼、三〇分の食前作業(除草、間引き、野菜の収穫など)があり、朝食後からヘブライ語学習が一時、ミーティングとレクチャーが昼食をはさんで五時半まで、またヘブライ語を学習し、夕食後と同じくレクチャーや

ミーティングで九時に終了。
レクチャーの内容は次の通りです。

- 開会挨拶 宮部一郎
- イスラエルの協同組合 牧野国男
- イスラエルの歴史と中東問題 奥村久雄
- キブツのスライド映写 奥村久雄
- キブツの受け入れ条件説明 奥村久雄
- 旅行中、滞在中の持ち物メモ 奥村久雄
- 旅行、旅券申請の説明 奥村久雄
- イスラエルの内情 奥村久雄
- 閉会挨拶 奥村久雄

ミーティングは簡単な自己紹介から始まり、それぞれがキブツ研修に行く目的を発表し、個人々々の概観をつかむ。三日目からグループで行く意義、個人で行く意義を検討し、「グループと個人の関係」に入る。四日目は午後から八ヶ岳の登山口まで散歩、そして晩にはコンパと今までの疲れをいやす。翌日から、「グループとプライベート」というテーマで熱のこもった話し合いがなされた。六日目には、グループの代表などがなごやかな内に決まり、午後からは、阪急から旅行説明があつて早くもイスラエル行きにウキウキしている人もあつた。

合宿参加者名簿

- | | | |
|-------|-----|------------|
| 市川正善 | 新潟 | ABCボウル |
| 武村永一 | 東京 | 三井造船 |
| 竹内清一 | 埼玉 | ボイラー製造 |
| 宮本和雄 | 福岡 | 商社会社 |
| 神田和子 | 千葉 | 精薄児施設 |
| 小林和雄 | 東京 | アルバイト中 |
| 増田悦子 | 愛知 | 国立コロニー(個人) |
| 早川愛子 | 岩手 | 北教大 |
| 小林悦子 | 北海道 | 北教大 |
| 杉本静子 | 北海道 | 酪農経営 |
| 亀田いづみ | 東京 | (個人) |
| 小川純生 | 岐阜 | |
| 松友早美 | 大阪 | 聖路加病院 |
| 中西啓子 | 大阪 | (株)AAP(個人) |
| 森 一人 | 京都 | 郵便局 |
| 山田こずえ | 茨木 | (一三回に延期) |
| 為田恵美子 | 東京 | 貿易協同組合 |
| 近藤美枝子 | 埼玉 | |
| 村山美智子 | 北海道 | グラフィック関係 |

世話係には、奥村久雄、青木浩信(一二回生の世話係)、荒井京子(旧性沖山、第九回生)、中村享子(第九回生)、奥中正夫があたりました。

―奥中正夫―

キブツ研修生募集

主催・社団法人 日本協同体協会
後援・イスラエル大使館

研修生派遣の主旨

当協会では、毎年二回、キブツ研修生を募集し、選考合格者でグループを結成してイスラエルのキブツに送っております。その主旨は、キブツ共同体社会で働きながらキブツの思想精神を体得したいという青年男女を斡旋するのであって、他意はありません。各自の判断によって応募して下さい。

応募資格

一、キブツ研修の目的が明確で、グループ生活のできる者。

- 二、年令十八才以上、三十才までの健康で肉体労働に耐える男女。
- 三、日本キブツ会々員（月刊キブツの年間購読者）であること。ただし、申込みと同時に入会可。
- 四、日常英会話は必須条件ではないが、できることが望ましい。

応募書類及び申込金

- 一、履歴書（本人の写真添付）。
- 二、健康診断書。
- 三、推薦書（上司、先輩、教師などの）。
- 四、調査資料二通（用紙は二十円切手同封の上、当協会に申込んで下さい）。

応募期日

一、昭和四十八年十一月三十日必着

選考方法

- 一、書類、論文審査（不備の場合失格）。
- 二、面接選考（十二月十六日の予定）。
- 三、国内研修会合宿一週間（選考合格者のみ）。

み。合宿不参加の場合は失格。

旅費・経費

- 一、往復旅費とも本人負担。
往路十八万円。外に諸経費負担五千元。復路については、現地解散であり各自帰国の時期も経路も自由であるが、テルアビブー東京間の航空運賃は約二十万円。
- 二、合格決定一週間以内に予約金二万円を支払うこと。予約金は旅費に振替られる。但し、解約されても原則として予約金はお返し致しません。

旅程概要（変更もある）

- 一、横浜→ナホトカ、船で二日。ナホトカ→ハバロフスク、列車。ハバロフスク→モスクワ、航空機。モスクワで市内観光。モスクワ→キシネフ、航空機。コルホーズ農場見学。キシネフ→イスタンブール、列車。イスタンブール→テルアビブ、航空機。行程九日の予定。

出発予定

一、昭和四十九年四月上旬。

キブツ研修の内容

- 一、一定条件のもとに、到着の日から六ヶ月間、同一キブツでグループ生活をする。その間、グループ及びキブツの了解なく中途脱退をしないこと。グループ解散後は自由行動であるが、行動予定を当協会に連絡すること。
- 二、労働は一週間に三十六時間（通常、一日六時間、週六日の労働）、一日二時間、週五、六日のヘブライ語授業。時々講義がある。
- 三、労働の種類は、果樹園、農場、牛舎、羊舎、鶏舎、食堂、洗濯場、子供の家庭園、工場など。
- 四、グループの国内旅行に六日間があてられ、キブツの都合で二、三回の旅行に分けられる。
- 五、アフリカ・アジア研究所に於て一週間のセミナーがあり、参加可能。
- 六、キブツの行事、文化活動に参加可能。

支給物その他

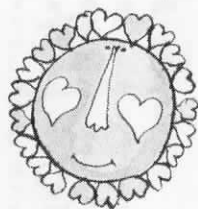
- 一、労働着、労働靴など労働に必要なものは全部支給されるが、その他のものは持参すること。
- 二、報酬なき労働がキブツの特長である。但し、滞在中の住、食は保証。毎月小額の小遣いが支給される。
- 三、キブツ内での作業中の傷病については、キブツが治療費を負担しますが、旅行中や私用中の傷病に備えて海外旅行者保険に加入すること。

その他

- 一、グループ研修でなく、単独でキブツ研修を希望される人もお世話できます。その場合は、日常英会話ができる人であること。
- 二、グループ研修生には、キブツ研修に経験のある世話係が同行して案内しますが、旅行中はもちろんのこと、キブツ滞在中も世話係に協力して下さい。
- 三、その他のことは面談の上で相談して下さい。

協調し合う精神が必要

滝 浪 豊 満



八月二十四日から八ヶ岳中央農場で第十二回生の国内合宿研修のこと。それについて何か気の付いたことがあればということですが、いざあらたまつて次期研修生の為にと言われても、あまり良いヒラメキが無いのですが、気づいたままを以下に記してみます。

第一に、キブツに於ける日課についてです。研修生は特別扱いを受けるような錯覚を持ちがちだと思いますが、労働については、他のボランティアは一日八時間労働で週五日、研修生は一日六時間で週六日ということを得ていた方がよいと思います。労働時間は一般のボランティアよりも一週間に四時間だけ少ないのですが、一日二時間で週五日のヘブライ語学習が加わりますから、結論としてはボランティアよりも週六時間多く拘

束（この言葉はよくないが）されることも合わせて納得しておいた方がいいでしょう。

第二に、研修生としてキブツに来た時は、キブツという集団に属するとともに、第十二回研修生という集団とも常にかかわって暮らすという事です。研修生グループといっても目的も、それまでの生活も、いろいろ異なった人々が他国に来て一緒に暮らすのですから、時には、（これも悪いたとえですが）キブツに疲れる以前に研修生グループそのものに疲れることもあると思います。何分にも協調し合う精神が必要です。

第三に、ここネティヴ・ハラメッドヘイの例を取っていますが、個人が働きたいという希望を持った場合と、キブツ側でこれだけの労働力が欲しいという意見があつ

た場合には、どうしても個人の思うようにはならないということです。そういう場合はキブツ側の意見が優先的になります。

これは、共同体が運営されて行く上では当然の事となつて来るでしょう。しかし、無論一〇〇パーセント不可能というのでは決してなく、話し合ひで個人の望みがかなえられて行く場合だってあります。

第四に、言葉。僕もまるっきり駄目な一人です。恐怖症になる必要はさらさらないのですが、やはり異国に来て他国人と一つに溶け合つて行く媒介となるものでは、言葉の占める割合は大きいと思います。一つでも余計に知っていれば、それを知らないより得るのは当然です。ヘブライ語を学ぶのも、一応英語の説明を通して教えられるわけですから、英語ができると不利な筈はありません。

第五は、これは協会へお願いですが、キブツ側と協会が取り交

次期キブツ 研修生に一言

している契約書については、その全文を研修生に教えておいた方がより良いと思います。一枚の紙とはいえ、それに沿って半年を生活するのですから、研修生もそれを知る義務があると思います。以上参考になる点がありましたら、第十二回生の皆さんにお話して下さい。

何はともあれ、大事なものをただ一つあげるとすれば、それは健康ですから、健康にはくれぐれも留意されるようお願い下さい。第

十二回生の皆さんの御成功をお祈りするとともに、ここネティヴにも訪ねて下さるよう重ねてお伝え下さい。

昨日（八月五日）吉見さんが、イランに向けて出発されました。九月二日にまたイスラエルに帰つてこれると聞いています。ここ一週間くらいは、どうしてか涼しい日々が続いています。なんだか陽差しにすこ秋を感じます。何はともあれ、我々十八人は皆元気で

キブツにおけるボランティア

吉 見 崇 一

キブツにおけるボランティアの存在とその処遇は、キブツの理念の理解には、ある意味では関係のないことかも知れません。これを裏付けるかの如く、先日、クファールマサリックグループが、ツウィと交した対話の中で、ツウィは、「キブツはボランティアがいなけ

れば、それなりに自立してやって行く道を必ず発見するだろう。目下ボランティアを受入れているのは、それによってお互いが益しているからであり、キブツは決してボランティアに依存しているわけではない」と言っていました。私達キブツの部外者がキブツを

知ろうとしてキブツに来た場合、キブツメンバーにならない限り、ボランティアという処遇を受け、その立場からキブツを見ることになりす。ですからボランティア（研修生を含む）を送る側の者は「ボランティアは、決してキブツに真の意味で参画できるわけではない」ことを志望者に知らせなければならぬと思います。ボランティアとキブツメンバーの間には一線が画かれています。ボランティアは、彼の全生活の基盤がキブツにあるわけではありませんが、それは当然のこと、そのことがキブツの尊厳と偉大さをいさかかも傷つけるものではありません。ところが、研修生の中には、その辺の事情を十分知らなかった人がいました。協会としても、その辺をよく説明する必要があると思います。

実際、「月刊キブツ」の記事には「キブツでは、メンバーはカクカク生活している」というものが

主で、そこにいる仮の住人たるボランティアの生活に関する記事は、前述の如くキブツの本質とはある意味で無関係なのでとりあげられていません。読者が、ボランティアとメンバーを区別しにくくなるわけ

それでは、ボランティアはキブツにおいて具体的にどのような処遇されるのか、その例を二つのキブツで実際に起つたことを通して説明します。

キブツ・クファール・マサリックにはテレビの組立工場があります。この工場では二人の日本人女性が働いていました。二人とも工場の仕事を望んではいなかったのですが、キブツの要請で止むなく働いたといった感じです。また、この綿畑で二人の女性が除草の仕事をしました。その仕事は単調で、かつ長時間、トラクターの椅子にすわって行わなければならないので、大変苦痛になり、以後その仕事を拒否したところ、大変なさわざ

なつた事があります。『労働の拒

否』そんな馬鹿な。働かないならば君達は食べることもならない。』と、事のはずみでツヴィの口からこんな言葉までとび出す始末です。

一方、ネティヴ・ハラメッドヘイでは、先般ある研修生の仕事のこと、グループの労働委員の方から強い要請を出したところ、いろいろの曲折があつた末のことですが、キプツの労働委員から「それは我々が決定する。君たちはそれに従つて働け。嫌ならどうぞ（出て行つて下さい）。この通りボランティアは沢山おりますから。」と言われました。実際、このキプツでは、いま一〇〇—一二〇名のボランティア（ナハルの兵隊、日本人研修グループ、スイス、カナダ、スエーデンの各グループ、個人のボランティア）がいて、研修の目的遂行には困難な面もあります。研修生は他のボランティアの中に埋もれてしまい、日常的にもキプツメンバーとの接触が多く

なります。

ボランティアについては、これまでにします。先日、ネティヴグループから出した文書は、強い疑問と不満をもつていたのであのような文書になつたのでしょうか、いつまでもつづやいていゝるわけではなく、現実に対処すべく、夫々に努力しています。キプツとの間

キプツ・ガドツトでの五ヶ月

畠中正夫

ギネガールで半年のグループ研修を終えたあと、キプツ・ガドツトに移り五ヶ月滞在しました。半年はいるといった為か、移つた当日からメンバーの独身者の一人室に入れました。

翌日、食堂の目につく所にヘブライ語で挨拶を書き、自分の写真を貼り付けたので、スグ名前を覚えられ、聞くとここに因ると、そんなことをしたボランティアは始めてだということでした。仕事は

に信頼関係がないなどといったことはありません。ご心配なく。皆さんの心配に反して、大方は楽しくやっています。もっとも、問題は私がキプツに於けるグループの現状をどれだけ適確に観察し、把握しているかにあります。

たく知らなかつたのですが、週三回二時間の練習のおかげで、白帯から黄帯、オレンジ帯まで取るこゝとが出来、他のキプツでデモンストレーションまで行いました。

また毎日のヘブライ語学校、週一回の英語クラブにも顔を出し、おかげで大半のメンバーと顔見知りになり、お茶に誘われることも多くなりました。

そして、キプツを出る前の晩は僕の誕生日でもあつたので、親しくしていたメンバーがパーティーを開いてくれ、ボランティアからはケーキが、キプツからはお茶やワインが出され本や壁かけなどのプレゼントもいただきました。代わりに日本の歌を歌い、折り紙や切手、日本の写真などを紹介したのです。

キプツでは積極的に行動しなればならないことをギネガール時代に知り、それを行動に移したのが日本人一人で過ごしたガドツトでの五ヶ月でした。